つね子さんと兎

野口雨情

ある日、つね子さんが、いつものやうにお庭へ出て、

兎来い　兎来い
赤い草履（ぞんぞ）買つてやろ

兎来い　兎来い
赤い簪（かんざし）買つてやろ

兎来い　兎来い
ぴよんこぴよんこはねて来い

と、『兎来いの唄』をうたつて遊んでをりますと、
『今日は、今日は』と云つて一疋の子兎が来ました。
『まア　お前は子兎ね』とつね子さんが云ひますと、
『さうです。わたしは子兎ですよ。あなたのお唄が聞えたので参りました』
と子兎はなつかしさうに云ひました。
『あら、わたしの唄が聞えたの。お前のお家（うち）は何処（どこ）なの』と訊きますと、
『わたしのお家ですか。ほら、お月さまの中にお餅を搗（つ）いてゐるでせう。あれはわたしの伯父さんなんですよ。わたしのお家も矢つぱりお月さまの中なんですが、

『兎来いの唄』が聞えたので、どうかしてゆきたいと、やっとのことで此処（ここ）まで参りました。』
『お月さまの中まで唄が聞えたの。』
『そりやアもう、手にとるやうによく聞えますよ。わたしのお友達は皆な真似てうたつてをりますもの。』
『さうなの』と、つね子さんは大へん感心をしまして、赤い鼻緒の草履と赤い花簪（かんざし）とを買つてやりました。
子兎は赤い鼻緒の草履をはいて、赤い花簪をさして嬉しさうに、

生れて　初めて

赤い草履（ぞんぞ）はいた
生れて　初めて
赤い簪さした

お月さんの国へ　もう帰らずに
ここのお庭の兎にならう。

と、うたひました。つね子さんも、
お月さんの国へ　もう帰らずに

ここのお庭の兎におなり
草履(ぞんぞ)切れたら
また買つてあげよう
赤い簪(かんざし)
また買つてあげよう

と、お庭中うたつて歩きました。子兎もつね子さんの後について、お庭中うたつて歩きました。

そのうちに、日が暮れて、夕(ゆふべ)のお月さまが東の空か

らあがつて来ました。
『わたしのお友達が此方（こつち）を見ながら大きな声でうたつてゐるから御覧なさい』と、子兎がつね子さんに云ひました。つね子さんが耳をすまして聞きますと、

つね子さん　ありがたう
赤い草履（ぞんぞ）　ありがたう
つね子さん　ありがたう
赤い簪（かんざし）　ありがたう

お月さんの国へ
遊びにおいで

と、お月さまの中で大勢の子兎がうたつてゐる唄が、
ほんたうに微(かすか)に聞えました。

底本：「定本　野口雨情　第六巻」未來社
１９８６（昭和61）年９月25日第1版第1刷発行
初出：「小学女生」
１９２１（大正10）年９月号
入力：林　幸雄
校正：今井忠夫
２００３年11月24日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんで

す。